

連載「大友時代を生きた人々」

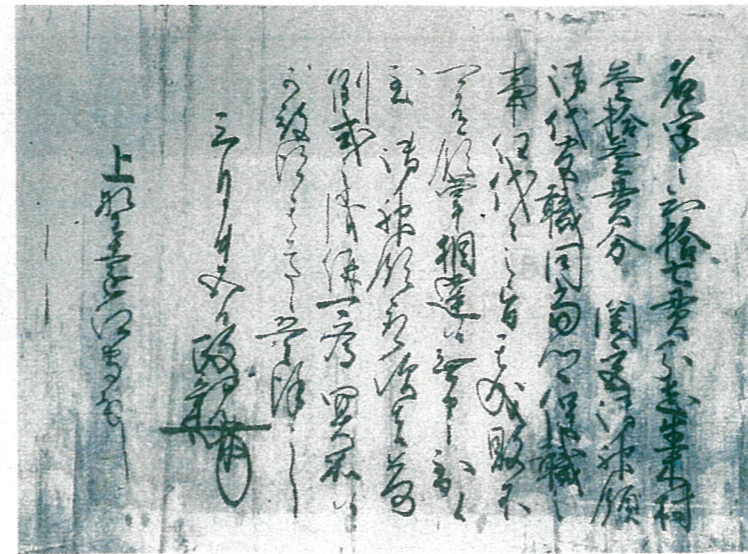
国際文化学部鹿毛敏夫教授の『上野遠江守～「早吸日女神社神領の代官」～』が掲載

●大分合同新聞朝刊 2019年1月5日(土)

文化

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



上野遠江守に「関宮御神領御代官職」を認めた大友政親書状（下田文書）

上野遠江守

早吸日女神社神領の代官

の志生木村（大分市）と「関宮御神領御代官職」「当郷（佐賀郷）役職」の成敗権をこれまで通り認められたことが分かります。この史料で上野氏が神領代官職をもつ「関宮」とは、古代の大室元（701）年以来佐賀関に鎮座とされる早吸日女神社のことです。同社は、海岸線に沿って東西に弓なりに港町を形成する佐賀関上浦の東外れに鳥居を構え、港町を見下ろす高台斜面に社殿を展開する鎮守です。海上安全祈願の神として、地元民や港町を訪れる人々のみならず、大名大友氏からの崇敬も集めていました。

海に囲まれた日本列島の主従制組織に組み込まれ各地には、古くから沿岸や海上での生産活動を営む「海民」による社会が形成されてきました。中世後期になると、彼らの一部は、領域支配を強め領国を拡大した守護大名や戦国大名の

特に、九州豊後の戦国大名大友氏の水軍組織に関する史料調査で新に、近年の史料調査で新たに、古代から豊後国随一の港町だった佐賀関を本拠とする水軍衆「上野氏」の存在が明らかになってきました。ここでは、その上野氏を巡る史料の状況と、佐賀郷での領主制の展開について紹介しましょう。上野氏にまつわる史料は、古くは、15世紀後半の守護大名大友政親の書状で、上野遠江守が政親から、本

（名古屋学院大学国際文化学部教授）
毎月1回掲載